

## ラジオ・テレビ放送長編小説『坂の上の家』 Ⅱ 定年後の生き様 Ⅱ

『坂の上の家』は、ラジオやテレビでも放映された書き下ろし長編小説です。

NHKラジオの「朝の小説」（朝の7時35分〜40分、1回5分として、昭和34（1959）年4月6日から8月1日までの全102回）語り手は小沢栄太郎で連続放送されました。刊行されている作品を朗読するのではなく、新聞連載のように書き下ろしたものをラジオで放送するもので、音声のみの新しい公開方法の試みです。全国放送で多大の反響を呼んだようです。直ぐに単行本（箱入、装幀・カット堀文子

『坂の上の家』が、昭和34年9月15日に中央公論社から出版されました。その帯に「NHK朝の小説」「芹沢光治良の書き下ろし長編小説」とあります。「あとがき（一九五九年七月十一日出発の前日 芹沢光治良）」には「NHKの『朝の小説』として放送するために、一回ずつ書きおろしたものである。…略：ラジオを通して、朗読するための小説は、新しい形式が必要ではないか、ふだん読書してもらえない人々を、耳から自然に小説の世界へひき入れることはできないか、そんな興味が私をとらえた。…略：新しい試みをしてみようと言険心が動いた。」作品の形式は―主題の展開には、ソナタ形式を選んだが、アンダンテの部分が終る頃から、しきりに聴取者から電話がかかって来た。…略：『坂の上の家』は、一つの手本になるから、放送されたままで、単行本にして欲しいと、手紙をくれた人も多かった。そんなわけで、放送したまま筆を加えることなしに、単行本にした。…略：放送のために書いた小説であるから、原型のまま出版すべきであろう。」と作者芹沢光治良は書いています。この後、7月19日から25日の

西独フランクフルトでの第30回世界ペン大会に日本

代表として参加したのです。フランス、スイスに滞在し、10月に帰国しました。多くの読者に愛読されま

したので、角川文庫『坂の上の家』として昭和34（1959）

年9月15日に角川書店から出版されました。この文庫は、昭和51年3月に十九版が出されているようにベストセラーになりました。その人気は、昭和38（1963）年

4月7日から日曜日夜（10時30分〜11時30分）に全20回でNHKテレビ・銀河ドラマとして放映されました。高橋玄羊脚本、加藤大介・山田昌・柴田悦彦等出演。

そして、新装版の『坂の上の家』が昭和48（1973）年4月20日に中央公論社から出版されたのです。この「あとがき（一九七三年四月 芹沢光治良）」には「中央公論社で『坂の上の家』の新装版を出すというので、久しぶりに再読して、作者として新しく感銘した。」と、芹沢光治良自身も高く評価しています。「これを創作したのは、私の六十一歳の年であった」「誰をもモデルにしたのではなくて、平凡な銀行員の勇三を創り、『坂の上の家』を建てて、外見平穏で幸福そうな家庭をいとなませることにした。そして、いざ人生の死を迎える時になって、わが妻とは何であったか、わが子とは何であったか、家庭とは何であったか、その本質をはっきり観せたかったから、この小説は書きつづけられたのだが、それは成功したろうか。」とも書いています。また、「毎日かならず五枚だけ書いて、百二日間つづけたが、そのおかげで、私は後に『人間の運命』を書くに当たって一日四、五枚の原稿を書くというノルマを自ら課して、実行することができたのだった。」「大河小説『人間の運命』（十四巻）を約十年を要して、書きおろすことができたが、この『坂の上の家』を再読して、当時を感慨深く思い出したものだ。」と、大河小説『人間の運命』を書き下ろして創作する試みの

先駆が『坂の上の家』の書き下ろし創作であったと書いています。そして、この『坂の上の家』の創作の後にパリで再会したソルボンヌ大学の学友で経済哲学者のR君からの助言で「ロマンシエ」小説家とエクリバン「作家・文学者」はじめて聞いたように、鮮かに心に響いて、私は旅の間じっくりわが作家生活を反省したものだ。そして、エクリバンになるためには、私の場合、ジャーナリズムの上で死ぬことになっても、注文原稿をこたわって、欲することを書きおろして発表することからはじめなければならないと、自覚したのだった。」とのこと。

ここから、後半生のエクリバンとしての自覚から、書き下ろして創作する作家生活が始められたのです。大きな転機のきっかけになった作品であるという評価が、長編小説『坂の上の家』に与えられていたのです。その実践として長編小説『告別』『愛と知と悲しみと』が書かれ、大河小説『人間の運命』の創作に本格的に取組んだことが知られます。

長編小説『坂の上の家』は、日本の敗戦後の家族の変遷と新民法の問題が、平凡な坂の上の家のこととして平明な文体で具体的に虚構されています。東京生

まれて一つ橋商大を卒業して、画家に成りたいという希望を諦めて、大蔵省の小役人の父親の關係で平凡な銀行員と成り、真面目に家族のために働き続け、来月に満55歳で厚生部長として定年を迎える野口勇三の生き様が描かれています。家族は妻と二女二男の子供があり、特に問題も無く、坂の上の家に住んでいるのです。専業主婦のとみ子に給料や退職金を全て任せています。長女愛子は若い医学博士の信夫と幸福な結婚をして二人の娘よし子・やす子がいます。長男洋一は大学を卒業し一流の電気メーカーに就職しています。東京本社から大阪支店に移動し、恋人の片岡さんがいましたが、東京本社に転勤して家族と同居しています。大学の学友と「ウスギタネー族の会」を持ち、松原一男・野村孝・鈴木文一郎・佐藤敬吾・佐藤美智子・山本等と密接な交流をしています。次女智子サトコは、家の経済事情から大学進学を諦めて外人の保険会社に勤め、次男健二は高校生で東大の理科の受験勉強をしているのです。

野口勇三は、支店長から厚生部長になっていますが、それ以上の出世は願っていません。退職後に関連会社山川製紙の再建処理「実は貸付金の回収を依頼されますが、最後には「頭取、それは絶対にできません」ときつぱり言つて断り、退職します。勇三は、ある朝寝床でふと「今日は銀行を休もうか」と思います。これまでに有給休暇もつたことがなく、「サラリーマンとして完全すぎた」と自省します。愛子が長女よし子のバイオリンの稽古の後、二人の娘を連れて実家に寄り、昼食を食べていることも初めて知ります。愛子は「四人の子供のうち、一番勇三と気があうばかりでなく、一番勇三に似ているところが多くて、父親思い」だと思っています。勇三は、愛子の「定年になって、したいことのないような人間は、生きがいある人生を送らなかつたのだ」という言葉、を思い出して自分の平凡な生涯を回想し、やりたいことをやらなかつたと思います。

勇三の55歳の誕生日に会社を退職し、家族が集つて「誕生日のお祝い」をすることになつていたので、その日が月曜日なので、とみ子の考えで日曜日にするこゝとなり、長女夫妻も孫二人をつれて参加しました。長男の洋一は高尾山への登山に行き遅くなつて帰り、ビールを飲み、がつがつと馳走を食べながら「定年になられて、お父さんはこれから、なにをなさるんですか」と聞きます。現在は、定年は10年延びて65歳になっていますが、まだ元気で定年後も働こうとしています。55歳だと、隠居するには早すぎるし、健二のようにまだ学業を終えていない子供もいることになります。この小説では年金のことは書か

れていません。勇三は定年後は悠々と好きな絵を描きたいと願つて、実行しませんが、駿河湾の三津海岸へ出掛けて、「若い頃に崇拜していた画家の描いた風景」を描きたいと思ひます。妻とみ子から、「え、絵をかくんですか。いい年をして、お父さんも酔狂ですね」と咎められます。勇三は久しぶりに絵を描き、「描くことは、何も彼も忘れさせてくれる」「仕事をしたという健康な疲労で、全身が気持ちいい」と思ひますが、とみ子から電報で呼び返されます。「勇三がわがままで、家のことを考えてくれない」と立腹します。とみ子は昼間に出掛け保険会社の講習を受け、保険勧誘の仕事を始めます。勇三は留守番をしながら絵を描きます。絵具を買う金が無く質屋に行きます。また、洋一に借りようとしてたり、固定資産税を納めずに絵具を買つてしまひます。

長男洋一が、東京の本社に転勤して、高校時代のグループ「ウスギタネー族の会」が勇三の家で行われ、自己紹介を受けた。その中に佐藤敬吾の妹美智子が参加していました。大阪支店に勤めていた時に付き合ひ、結婚を約束するよくなつてなつていた片岡さんがいました。文才のある片岡さんは盛んに洋一に便りを書きます。東京本社に戻ると、洋一はぎんから離れようとしています。片岡さんは速達を書いて、上京し野口家を直接に尋ねます。勇三が対応しますが、大阪に帰らずに、洋一を結婚詐欺として訴えると脅迫します。勇三は同情しますが、とみ子は片岡さんは勿論、美智子との結婚にも反対します。長男の結婚は昔風な形式で「しとやかな令嬢」を正式に迎えることを主張します。洋一はぎんと美智子を安易に二股に掛けていたり、戦後の新民法から二人だけの合意で結婚しようとしています。智子も兄を「狡い」と批判します。

もう家に居れないと勇三は家出をしようとしています。勇三は「退職金の半分もらえば、すぐにでも出て行く」と言ひますが、とみ子は「退職金は銀行が私や子供だけにくれたものですよ」と、智子を結婚させ、健二を教育する義務と責任があると主張します。勇三はイギリス製のバッグを質屋に5万円で売り、家を出ます。最後には愛子の家の茶室に身を寄せ、絵を描きます。津田画伯の世話で、新制会に入選します。片岡さんは服毒自殺をしますが、回復します。

洋一は美智子とホールで合同結婚をして、家を出て行きます。とみ子は勇三に電話して、「帰つて来て下さい」と懇願します。こうして、この長編小説は終わります。銀行員の経験はない芹沢光治良は、作家としての想像力で定年退職した家族の生き様をリアルに活写しています。〔令和5(2023)年1月讞〕

## 新聞連載長編小説『運命の河』 Ⅱ 戦中派女性と戦後派女性 Ⅱ

『運命の河』は、昭和32(1957)年10月から同33年11月までの一年間、新聞三紙(中部日本新聞・北海道新聞・西日本新聞)に連載された長編小説です。単行本『運命の河』が、昭和34年2月10日に角川書店から出版されました。巻頭言としてメリメの「女は不幸である、しかし一生に二度幸福な時がある。その一つは結婚の時、もう一つは死ぬ時である。」が掲載されています。「あとがき」に、「久しぶりの新聞連載小説であったが、毎日のしんで書いたことは、意外な発見であった。……出版にあたって切抜を読みかえしてみて、加筆する必要があるなかった。」とあり、「何を書く」としたか、読者の読みとつてくれるに委せるが、私としては、女主人公たつを書き得たことで満足している。かつて私の小説に登場しなかったような女性をつくりあげたことで、満足している。」と書いています。新聞に一年間連載したので、普通の長編小説の二倍の分量があります。新聞連載ということで、文体は平易なものとし、新しい女性を登場させて多くの人々に愛読されることを意図していると思われまします。しかし、構成としては工夫され、芹沢文学の代表作の一つとして評価されると思えます。

南校(旧県立第三中学校)の三年生花村みどりは、母祖母きんの娘として育てられています。みどりは母が貧乏なので大学への進学を諦めて、就職しようとしています。成績は抜群で、美人過ぎるみどりなのに、丸銀行に不採用になり、新百貨店も不採用になります。「複雑な家庭の事情」で採用されないとのこと。修学旅行の前に隣の果物屋のおかみさんからの耳うちで「あんたはお姉さんの子だもの」と言われたことを思い出します。山辺先生に言われて、みどりは平原

町の兄一男の家を訪ねます。兄から「母は貧乏どころ

か、大金持である。」と聞きます。また、「東京の姉さんを訪ねる必要があるぞ。」と言われて、勤労感謝の日

に会いに行きます。みどりは一男の妻いそ子から「姉の子」であり、本当の父についてはお姉さんに直接に聞くように言われます。

紙の表紙『運命の河』

実母である姉たつは、松原朝雲画伯から愛されモデ

ルとなり東京に二軒家が与えられ、みどりを産みます。朝雲画伯は、みどりを両親の籍に入れる代償に祖母きんに津浦町に三軒の貸家と煙草屋を買って与えます。祖母きんはみどりをたつの妹として育て、貧乏を装います。しかし、朝雲画伯が昭和十六年に六十歳で死去してしまします。たつは戦中に生き抜くために、角田清人と同棲し、清男と治子を産みます。角田家から三宿の家を買ってもらいますが、清人は戦地に出征します。

みどりは上京して、姉たつに「あたし、姉さんの子ですか」「ねえ、父はだれですか、どんな人間ですか」と聞きます。母たつは「偉い、偉い、絵かきさんでした」と告白しますが、みどりは「偉い画家だって、誰ですか。名前を教えてください」と聞き、天才画家松原朝雲だと知りまします。みどりは同級生の杉道夫に美術雑誌の古い特別号を見せてもらい、父朝雲画伯の三葉の写真を見まします。母子観音・慈悲観音や富士八景等の作品の写真も見まします。特に母子観音を見て感激の涙をこぼします。そして、杉に朝雲画伯の娘であることを告白し、就職ではなく進学「東大を受験」することも伝えます。

母たつは、戦地から帰還した角田に二人の子を認知してもらえなくて、その養育費を月々にもらい生活しているのですが、父は戦死して未亡人になっていくと二人の子には偽っているのです。ところが、角田は事業に成功して清和興業社長となり、旧山川子爵の令嬢と結婚してしまします。たつは、元PTA会長で小説家の井沢に身の上相談をしたりもします。たつはあけみの名で女給をしていた時に親しくなった名古屋の社長円地三郎の愛人になっていまします。

親友の野田町子は父敬一が戦死し、母静子は未亡人となり、上京して高校の先生(後には保険の勧誘員)をしています。町子は進学組で東大を受験しようとしています。みどりは就職組ですが、成績は抜群です。母に会い、祖母は貧乏ではないことを知り、東大を受験しようとして山辺先生に相談します。山辺先生は東大を卒業して南校の教師をしています。有能な学者で、みどり達の卒業と共に教師を退職して東京の学院大学の哲学の先生になります。山辺先生は、受験しようとするみどりに「才能を生かした方がいい」「君の生活は明日にあるのだからね、君自身がきずいて行く明日にあるのだと思つて、自分で励んで行けよ」と励まします。先輩「みどりの演劇部の先輩の井上は漁師の子でかっぱ(河童)と綽名されていますが、東大に合格しています。井上は山辺先生からみどりと町子の面倒をみるように依頼されます。井上は二人を合唱(歌声)喫茶に誘います。

一人とも東大に合格をします。同級生の杉道夫は慶大に合格します。

この長編小説には、多くの人物群が登場しますが、戦中派の女として角田たと野田静子の生き様と戦後派の女としての花村みどりと野田町子の生き様が対比されて、実に詳細に展開されているのです。読み応えがあります。

太平洋戦争の中、一高の名物ドイツ語教授の娘那須静子は、東大建築家を卒業した野田啓一と結婚し町子が生まれます。啓一は出征して戦死します。戦争未亡人となった野田静子は、夫の津浦の実家「義父母」に町子を預けて、東京で高校の先生になります。本郷の実母が死んでからは、保険の勧誘員になって働いています。町子は南校の進学組で東大受験をひたすら目指します。みどりも南校に入学して三番を下らない成績で、町子と親友になります。しかし、母「実母」が守銭奴で、貧乏だと言いくるめられて育ち、大学には行けず就職しなければならぬと就職組に属して地元の銀行や百貨店の就職試験を受けましたが全て不採用となります。兄一男を訪ねて相談をすると、みどりは姉たつの子で祖母は貧乏ではなく大金持ちだと知らされます。東京の実母たつも訪ねて、大学を受験してもよいと知り、進学組になり、町子と東大受験して二人とも合格します。町子は東大に入学しましたが、学業を続けることに疑問を持ち、南校を止めて学院大学の哲学の先生になっている山辺先生に相談して短大部の保育科に転向します。保母となり、実家の津浦に保育園か幼稚園を建てて、子供達を育て、故里の為に尽くしたいという夢を語ります。母静子と生活し、愛人がいることを知り反発します。父と同級生であった化学繊維会社の技術長林省三ですが、町子を娘として愛したのを、町子は林を誤解して恋人として愛し、母に反攻します。町子の純粋だが幼稚さが知られます。ところが、南校の数学の先生で、東大の助手として復帰しようとする志賀先生に求愛され、東方荘と一緒に住みます。母の家に居られなくなったみどりが、そのアパートに同居します。町子は母と林の結婚を認めるようになり、志賀がフランスに留学するのに、町子と一緒に行くことを求め、アテネフランスでフランス語を学ぶように求めます。しかし町子は不安をみどりに語ります。

みどりの実母たつの生涯は、破天荒なものです。芥沢文学では、このような女性は無く、異色の女性主人公と言えます。よくぞ、このように美貌で妖艶な女性主人公を描いたと感心させられます。戦前の動乱時代に、たつは津浦「沼津」に父花村一蔵と母きんの長女として生まれ、美人（津浦小町）として成長しました。

18歳で天才画家松原朝雲に見初められ、モデル「妾・二豆」として東京の広大な二階建ての家に匿われます。たつは朝雲が有名な画家であることも知らず、貧しい両親の為に身を売ったのです。娘みどりが生まれます。母さんが娘の家に来て世話をしようとしたのを朝雲画伯が嫌って、みどりをたつの両親の籍に入れて、その代償として津浦に三軒の貸家と小さな煙草店を買って与えます。みどりはたつの妹として育てられたのです。祖母を母として成長したのです。ところが、戦中の昭和十六年に朝雲画伯が60歳で急死して、松原家から見捨てられます。たつは途方に暮れて、出会った青年角田清人と同棲し、清男と治子が生まれます。清人は出征し、無事に帰還しますが、たつ親子とは住まず、二人の子も認知してくれず、養育費を出してもらい生活しています。角田は清和興行株式会社を興し社長となります。そして、旧山川子爵の令嬢と結婚してしまいます。養育費の増額や東大生下宿の家を建ててもらいたいと要求しますが受け入れられません。それで、女給あけみとして勤めます。ここで出会った名古屋の社長円地三郎の東京の愛人「二豆」となり、肉体関係で報酬を得ていました。

この家に娘みどりが訪ねて来たのです。東大に合格して、同居することになります。母の愛人生活を嫌って、町子のアパートに移住します。みどりは東大の理科一類に入学しますが、自分が本当にやりたいのは何かを模索し、天才画家松原朝雲の娘であること、高校で描いた絵を図画の前川先生から美大の受験を勧められたことを思い出します。ブリジストン美術館で見たセザンヌやゴッホの油絵に感動し、絵画を習い始めます。東大を二学期で退学してしまいます。

母たつは、慶大生の杉道夫の父で丸銀行杉頭取とも朝雲画伯の遺作を売ることから、肉体関係になります。朝雲画伯の遺作を売ることから、骨董商の立川の愛人にもなり、その宝石部門の店員になります。また、清男と治子の家庭教師の吉田とも情交します。中学生となった清男は、父角田と住みたいと、洗足池の近所で自動車に飛び込んで自殺します。治子も女家庭教師と共に角田家に引き取られ、たつは一人となります。立川に騙されて家も売り、アパート住まいになってしまいます。みどりは、画家柴田次郎に見初められ、フランス留学を誘われます。朝雲画伯の絵を杉頭取に売るために津浦に帰ります。「K川「狩野川」はゆるやかに流れている。一体私はどこへ流れて行くのだろうか。」と自問し、「私は姉の娘であつても、姉とはちがうのだと、奮いたつて、橋をわたって行つた。」と書いてこの長編小説は完結します。〔令和4(2022)年10月讞〕